



—湾岸・アラビア半島地域ニュース—

クウェイトで国会議員選挙実施

2012年12月1日、クウェイトで国会議員選挙（定数50）が行われ、2日に当選者が発表された。今般の選挙は、首長家・政府と野党との対立が昂じ、2012年2月に選出された国会が6月に解散させられた後の政治混乱の中で行われた。このため、ムスリム同胞団やサラフィー主義者、リベラルなどのイデオロギー潮流（注：クウェイトでは政党の結成が認められていないため、思想・信条ごとに会派や緩やかな集団を形成して政治活動が行われている。）、や、ムタイラ、アワージマという有力部族が選挙をボイコットした。この結果、投票率は前回選挙の6割～7割から、情報省の発表で40.3%、野党側の発表で26.7%に低下した。また、新議会の構成は「異例の」構成（2012年12月3日付『アル=ハヤート』）となった。同紙が挙げた「異例な」点としては、シーア派の議員が17名選出され、総議席の約3分の1を占めたこと（シーア派有権者は全体の15%程度と推計されている。）ことがある。

野党勢力は、今般の選挙結果を拒否、議会の無効を申し立てたり、「違法な議会の打倒」を目指す抗議行動を呼びかけたりしている。このため、野党のボイコットにより親政府的な議会が生まれ、政府と議会との関係が見た目上は安定したとしても、野党側の抗議行動に支持が集まるような場合は、政情の安定は望むべくもない。

クウェイトでは、過去数年にわたり首長家・政府と議会との関係が安定せず、首長家出身の閣僚の喚問要求、内閣総辞職、議会の解散と選挙を繰り返してきた。野党側が首長家に対し権限の縮小や国政についての説明を求めるのに対し、首長家がこれを拒み、政府や議会が機能不全に陥っていたのである。このような状況は2008年ごろから繰り返されていたため、クウェイトの野党による抗議行動は本質的にはいわゆる「アラブの春」とは無関係のものであった。しかし、「アラブの春」の影響を受ける形で野党側が街頭行動を強化、「首長家以外からの首相の選出」へと要求の水準を上げるなど、2012年に入り対立が激化していた。

クウェイトは、アラビア半島の王制諸国の中では比較的議会や選挙の制度が整っている国であるが、長期間にわたり政府や議会がほとんど機能せず、首長家と首長家出身の閣僚により国政が運営される状態にあった。新議会の発足を受け、新たに組閣が行われる予定ではあるが、政府や議会が実質的に機能するかについては楽観できない。また、主要会派・政治潮流のボイコットに乗じる形でシーア派の議員が増えたことにより、組閣に際してシーア派の

入閣増加や副首相職についての要求が出ることも予想されており、宗派を単位とした政治的な権益争いも新たな争点として顕在化する可能性がある。

◎本「かわら版」の許可なき複製、転送、引用はご遠慮ください。
ご質問・お問合せ先 公益財団法人中東調査会 TEL:03-3371-5798、FAX:03-3371-5799